

岡倉天心と観念としての東洋美術の創出

稲賀繁美

はじめに

一九〇一年から二年にかけて、岡倉天心は第一回目のインド滞在を果たします。それが東洋美術史の構想にとっていかなる意味をもったか。その中で岡倉天心は、いかなる役割を担ったのか。今回はそうしたことについてお話ししようと思います。

ジョセフィーヌ・マクラウドという人

最初にご紹介したいのは、ジョセフィーヌ・マクラウドという女性です。生年が一八五八年、没年一九四九年、つまり九〇歳以上まで長生きされた方です。ニューヨークの裕福な家庭のお嬢様であったマクラウドはインドの宗教者、ヴィヴェカーナダに帰依していました。彼は、ラーマクリシュナのお弟子として、一九世紀後半から、インドにおけるヒンディズムの近代的な刷新にあたって、重要な役割を果たした人です。一八九二年のシカゴ万国博覧会はコロンブスがアメリカを「発見」して四百周年を記念して開催された万国博覧会ですが、このときの世



マクラウドの肖像

界宗教会議にまだ若かったヴィヴェカーナンダが突如登壇して、一座の聴衆を魅了する講演をしたというのは、よく知られている話です。マクラウドはそのあと日本に参ります。谷中で天心が何人かの英国人や英語圏の女性に対して、日本美術の講演・講義をしていたといわれています。その聴講者の一人にこのジョセフィーヌ・マクラウドがあった。彼女が天心に対して、ヴィヴェカーナンダに会いに行きなさいと進言し、一九〇一年末のインド旅行が実現した。

一九〇一年一月三〇日に、堀至徳というお坊さんを横浜で乗せた常陸丸が二月一日に神戸に入港し、四日になると、神戸でマクラウドが乗船した。門司から天心が乗り込んで、香港を渡りシンガポール、そして二月二九日に常陸丸がコロンボに着いたという旅程が、堀岡弥寿子様のお仕事などからわかります。一九〇二年一月六日にカルカットに入る。そして、その日のうちにハウラーのベルルの僧院を訪れて、ヴィヴェカーナンダと初対面をすることになり、堀至徳はベルル僧院に寄宿することになる。最初の対面の印象は、かなり強烈だった様子であります。天心は日本で織田徳能というお坊さんと一緒に、世界宗教会議の日本版をやらうと画策する。結局これは失敗に終わるわけですが、それでも、その織田徳能宛ての手紙に、有名な一節が見え、「師は、気魄学識超然拔群、一大の名士とあい見え、五天いたるところ、敬慕せ

ざるなし」。さらに彼らが会った最初の日から、自分たちの宗教観に関する一番中核的な問題に踏み込んでいたことも、同じ短い手紙の中に出てきます。二点問題がありますが、一点は大乗仏教と小乗仏教の関係です。「師は大乗をもつて小乗に先んじたるものと論ず」と。また「東西を湊合〔東西を合わせて〕、不二法門を説破す。」「不二法門」とありますのは、アドヴァイティズムという言葉ですが、維摩經に由来する文句で、単純に言ってしまうと「すべてのものは一つに通ずる、その一つという原理から、世界というのは、現象しているのだ」と、そういう教えになりますが、それが第二点。この二つの論点についてお互いの意見がびたりと一致した事が知られます。

二人の出会いを司ったマクラウドはこんな回想を残しています。「人生で一番幸福だった瞬間の一つといえは、やはりベルルの僧院で、岡

倉さんがヴィヴェカーナンダと会ったこと。数日経ったあとで、天心は私〔つまりマクラウド〕に対して、ちよつとつっけんどんな調子でこう言つた。『ヴィヴェカーナンダは、私たちのもの』。『彼は東洋人だ。従つてあなたのものではない。』と。どうもインドにいた間、岡倉は、やつぱり自分は東洋人なのだ、という意識をすごく強く持っていた様子です。

それではマクラウドは、それを聞いて、どう反応したのか。年譜でお分かりの通り、マクラウドは天心よりも三歳くらい年上です。天心に對してちよつと庇護者的な態度をとっていた彼女は、その言葉を聴いて、ヴィヴェカーナンダと天心の間に、本当に理解があつたのだとわかつて、引き合わせた私としては、これは本当にいいことをしたのだと思つた、と。そう回想している。それからまた数日して、今度はスワミイ・ヴィヴェカーナンダがこう言つた。これ

も有名な一節ですが、「まるで、もう久しく失われていた兄弟がもどってきたようだ」と。ヴィヴェカーナンダが、岡倉に対して、われわれの仲間に加わる気はないのか、と尋ねると、岡倉はこう返した。「いや、まだこの世の始末がついていない」。この世の始末とは、何なのでしよう。まず一つとしては、日本の伝統美術を近代においてよみがえらせるといふ、日本美術院の事業。二つ目に、インドの伝記作家たちのあいだでは、岡倉はインドに革命運動を輸出しに來たのだ、といわれている。アジアの連帯を説く革命家としての天心の使命。ただ、日本側から見ると、少し状況は変わってくる。まずインド美術を見たいという天心の心持ちは疑えないでしょう。その前に中国旅行をしていた天心は、その中国とインドとを結びつけた達成として日本美術史を構想していた。それがさきほどの、アドヴァイタと結びつき、中、印を綜合し

て、その上に日本という三角形の構図が現れる。その源であるインド古美術の実証は、もちろん必要だ。二つ目に、実は当時、日本の仏教界の人たちが、ぞくぞくとチベットに入り、そしてまたインドに行っています。例えば最近、チベット潜入時に残した書簡が出てきた能海寛が一八九九年。みなさんご存知の、河口慧海、大宮孝潤がチベットを通って、インドへ入っていくのが、一九〇一年。さらに西本願寺の大谷光瑞は中央アジア経由でインドに入りますが、これも一九〇二年。その中に、天心自身の行動も位置づけることができるだろう。三つ目としては、例の九鬼男爵夫人、ハツとの一連の事件です。そのことがスキヤンダルに取り上げられて、岡倉は公職からほとんど追放され、インドへしばらく逃げ出さざるを得ない状況もあった。ただ、マクラウド側から見れば、こうしたわけで、ヴィヴェカーナンダと岡倉天心の出会いという形

で、彼女の目論見が実現をみたわけです。

ニヴェディタという人

二人目の人、ニヴェディタの方に話を移したいと思います。アイルランド出身の方で、本名はマーガレット・サミュエル・ノーブル。一八九五年にロンドンで、ヴィヴェカーナンダに会って、その教えに帰依した。九八年からカルカッタに居を移しています。タゴール一族も、さして離れないところにいるわけですね。そのニヴェディタが、先ほど述べたマクラウドと、本当に三日とおかずといった調子で、手紙を書いています。この手紙の内容は、まだあまり紹介されていないような気がします。

例えば四月一九日、天心が織田、堀を連れて、ブッダガヤに出発する。その日までニヴェディタは、天心たちの面倒をみるのに忙しかったの



シスター・ニヴェディタの肖像
(The Complete Works of
Sister Nivedita)



左から、マクラウド嬢、オリ・ブル婦人、
ヴィヴェカーナンダ、ニヴェディタ女史

ですが、これではやく手紙を書く暇ができたのでしよう。ニヴェディタは天心のことを、リノセロスと呼んでいる。犀です。それから、チーフテンなんて呼んでいて、山賊の親分みたいですけども、「チーフテンとその一味は、今日からブツダガヤに行きました」と、そういう調子で書いている。五月一日付の手紙は一行がブツダガヤから戻ったことを告げ、織田得能の日本への帰国を報じています。四月二八日の朝、ニヴェディタがようやく床を立つて、着付けをしようなんて思っていたところに、天心がこのこ来ちゃった。これは、当時のヴィクトリア朝の倫理観念からすると、結構危ういことだと思うのですが、逆にいうと、ここには、天心とニヴェディタの親密な関係も、ちょっと顔を見せている。そのあとで、「犀、リノセロス君はいたって元気である」という具合に言って、マクラウドを安心させている。そのあと七月二

日、ニヴェディタは天心たちといっしょに、バグザールに出かけていることが、この手紙から確認できます。

今、七月二日といいましたが、この二日後に、彼らにとつては非常に衝撃的な事件が起こります。つまり、一九〇二年の七月四日に、他でもないヴィヴェカーナンダは、三八歳で亡くなってしまうのです。その三週間後の七月二八日の手紙で、ニヴェディタ自身が、こんなことを言っています。ヴィヴェカーナンダは、その晩年インドについて、こんな嘆息をもらしていた、と。「我が祖国はほかならぬその子どもたちの墓場と化している」。つまりインドの子どもたちは虐げられて、悲惨な境涯にある。そして「彼女（つまりインド）に暴行を加えるありとあらゆる暴漢たちの天国に、今やインドは成り果てている」。これが晩年のヴィヴェカーナンダの、インドに対する嘆きであつた。英語で

Anywhere out of Bengal」と書いている。とにかくベンガル以外のどこかに、という希望を、そのベンガルを愛してやまないはずのベンガル出身のインド人たちが、痛切に抱かざるを得ない状況にあった。それだけに逆に天心は自分の生きていく、日本という国が、アジアにおける二〇世紀の期待の星であるということをしやましにも実感せざるを得なかった。

もうひとつだけ、このニヴェディタと天心のかかわりについて、今まで知られていなかったことを、導入の最後として、一言申し上げておきたいと思います。

ニヴェディタが、天心の手稿に手を入れていくことは、今残っている手稿からもわかる。これは中村愿先生が前回お話しなさったとおりです。ただ、ニヴェディタは一応手を入れはしたのですが、実際に印刷されたものは、岡倉天心が書いた原文のほうで、ほとんどそのまま生き

ている。とはいえ彼女の仲介はけっして無意味ではなかった。それを裏付ける逸話が、手紙の中に一つ出てきます。一九〇二年九月一四日の長い手紙があり、ニヴェディタは、『東洋の理想』について、マクラウドに向かって書いています。実は編集者が、試し刷りを切り刻むという自由裁量をとってしまった、これはとりわけ不運な仕打ちで、天心のテキストが織り成していた音楽を台無しにしてしまった。これは大変だということでニヴェディタは校正の段階でその文章をもとに戻した。こんな自由裁量はもう願ひ下げです云々、と告白している。今われわれが知っているような形で『東洋の理想』が読めることの裏に、ニヴェディタのこうした働きがあったことは、否定できないだろうと思われる。

それらの著作は、彼女自身の著述とどのような関係にあったのでしょうか。彼女の著作には、

一九〇一年から三年にかけて *Kali the Mother* (『母としてのカリ女神』) という本がございます。それから、*The Webs of Indian Life* 仮に『インドの生活——その縦糸、横糸』と訳してみましたが、それが、一九〇四年に出ています。これらの本の出版に関して、ニヴェイタは、こんな手紙も残しています。つまり、『最初の『母としてのカリ女神』という本。そして、次は岡倉のあの本。つまり、『東洋の理想』の出版に携わって、そのあとでようやく今度は『インドの生活』という本をまとめることができた。これは、自分がなした、ヴィヴェカーナンダに対する、献身のしるしとして残るだろう』云々、と。以上のことを前提として、今日の本題に入りましょう。つまり、東洋美術史の成立と、インドとの関係です。

「アジアはひとつ」とベンガル分割令

このインド旅行が、岡倉の東洋美術観の形成にあつて、どのような役割を果たしたのか、ということに話を進めていきたいと思います。

ニヴェイタという女性を、岡倉天心自身がどう評価していたかを確かめましょう。『茶の本』の冒頭近くには、*It is rarely that the chivalrous pen of a Lafcadio Hearn or that of the author of The Web of Indian Life enlivens the Oriental darkness with the torch of our own sentiments.* と言葉が出てきます。この、*Web of Indian Life* 日本語訳に注もついています。今お話を申し上げたのでお分かりだと思えます。名前は出ていませんが、天心はニヴェイタのことを言っているわけですね。彼女の著作をラフカディオ・ハーンの著作と比べている。東洋の暗がり、を、われわれ自身の感情という松明でもって、照らし出すことは、稀にしかなかったけれども、

この二冊の本はそれを成し遂げているのだと。ラファディオ・ハーンの騎士道精神にのっとった筆、それから、インド生活についてのニヴェディタの、いかにも女性的な観察、そしてインドの女性の存在、女性の生活に対する理解ある記述に対して、岡倉がおおきな親近感を抱いていたことは、明らかだと思います。

実はニヴェディタが、岡倉滞在の際中にマクラウドに送っている手紙ですけれども、「天心と私はまるで、おままごとみたいなことをしているのです。駄々っこをして悪さばかりする子どもを演じているのが天心で、そのすばらしいお母さんを演じているのが、私なのです」という一節があるんですね。『甘えの構造』をお書きになった土居健郎先生が岡倉天心の女性に対する甘えの構造ということを言っておられて、これは北米の研究者のフレッド・ノートヘルフアーさんも指摘している。ただなかなか、直接

の証拠物件というものが出てこなかったのですね。このニヴェディタの手紙の一節は、将来天心の新しい伝記を書く方には、ぜひとも使っていたければなんて、思っております。

今度は逆に、ニヴェディタの『東洋の理想』への序文を、見ていきたいと思います。The *Ideals of The East* へのイントロダクションとして有名なところですが、*Therefore it is of supreme value to show Asia, as Mr. Okakura does, というわけで、「岡倉がしたように、アジアを見ることには、大変な価値がある」と。not as the congeries of geographical fragments that we imagined,「われわれが今まで思い描いていたような、地理的な断片としてアジアを捉えたのはだめなのです」*そうではなくて、*but as a united living organism, each part dependent on all the others, the whole breathing a single complex life.*これは、ニヴェディタについてかなり

重要な概念だったことがわかりますが、生きて
いる、生き生きとした一つの有機体、それも統
一した有機体としてアジアを見なくてはいいけ
ない。ひとつひとつの部分が、他の全体にかかわ
り、相互依存であつて、そして全体が単一であ
りながら、しかし複合した、非常に複雑な生と
いうものを、息づいている。そういう全体とし
てアジアを見なくてはいけない、と言っている。
つまり、東洋の理想の冒頭には、Asia is one
「アジアは一つ」という有名な言葉があります
が、それと呼応するアジア観を、ニヴェディ
タは、このイントロダクションで提唱している。

では、ここでニヴェディタは何を考えていた
のかという問題が一つ出てきます。ニヴェディ
タがこの序文を執筆したのは、一九〇二年の夏
頃だろうといわれています。ということは、ヴ
イヴェカーナンダが亡くなった直後となるわけ
ですね。岡倉は一九〇二年の一月に来るわけ

ですが、その直前に実は、ニヴェディタは、クロ
ポトキンに会っていたりします。クロポトキン
は、社会を煽動して、暴力革命を起こす、アナ
ーキスト革命家として、当時一番有名だった人
ですね。岡倉もどうやら日本からきた革命家ら
しいというイメージがインドで広がった原因の
一つは、ニヴェディタ、その人の振る舞いにあ
つたらしいということが見えてきます。一九〇
二年の七月にヴィヴェカーナンダが亡くなりま
すが、ニヴェディタはこの直後のカルカッタの
新聞で、今後、ラーマクリシュナ協会と自分、
つまりニヴェディタの活動は、一切関係がない、
と宣言する。一つには、ラーマクリシュナ協会
として、これ以上ニヴェディタの非合法活動と
自分たちの宗教活動がいつしよにされてはたま
らない。ニヴェディタ側からしても、ラーマク
リシュナ協会の宗教的な活動とは別に、いわば
インドの独立を目指した政治運動に積極的に関

わっていききたい。まさにそういう中で、『東洋の理想』の序文は書かれていたのですね。

岡倉の本が出て二年後ほどになりますけれども、一九〇五年に、ベンガル分割令という、法令が施行されるという予告がされます。その施行に伴って、英国製品のボイコット運動、いわゆるスワデシ運動が高揚をみます。これには、タゴール家も関与しているわけですが、ここで女性として一番指導的な役割を果たすことになる一人が、他でもないニヴェディタ女史なのですね。ベンガル分割令、つまり、イギリスの命令によってばらにされてしまった植民地にあつて、ニヴェディタは岡倉の言う、アジアは一つという言葉を復唱している。インドは一つとなつて、独立しなくてはいけない。そうした使命感を抱いていたニヴェディタだったからこそ、天心の理想の訴えに共鳴した。一九〇二年のベンガルの文脈では、植民地下で分裂の危機

に悩んでいるインドに対する、岡倉の同情が表明されていて、インドの民に対する思いが「アジアは一つ」という言葉に結びついたのだろう。岡倉古志郎さんの遺著になった『祖父・天心』にはベンガルの革命家たちとの天心のつながりを探った、長い論文があります。この中で古志郎先生が結論として至った解釈は、ほぼ私が今申し上げましたことと重なります。そして、今申した意味での「インドは一つであれ」、という言葉が、実はインド美術史の構築の中で、かなり重要な役割を果たしている。そこに話を進めていきましょう。

ハヴェルの国民主義的インド美術理解

アーネスト・ビンフィールド・ハベル Ernest Binfield Havell という人は、一八六一年に生まれて、一九三四年に亡くなっています。彼は一

九〇八年に、*Indian Sculpture & Painting* 『インドの彫刻と絵画』という本、一年には、『インドの建築』という本を出しています。それから同じ年に、*The Ideals of Indian Art* 『インド美術の理想』ですが、この *The Ideals of* というのは、岡倉の『東洋の理想』とまったく同じ使い方をしているわけですね。彼はイギリス人でマドラスの美術学校で教鞭をとっていたのですが、天心がカルカッタに来る数ヶ月前に、カルカッタに移って、美術学校でこのあと校長を務める人です。彼はインドを治めていたイギリス統治者、とりわけカーゾン総督に対しては大変に批判的な立場を表明していた人です。そして、彼は岡倉がインドに来るほんの一と月ほど前に、ニヴェディタと最初の出会いを果たし、このあとニヴェディタとかなり密接な関係をもつことになります。

ハヴェルという人は、スワデシ運動が高揚を

みたころに、インド美術に関する研究書をつぎつぎと公にする人であります。彼は一九一〇年に、ロンドンの *Royal Society of Arts* でインド美術について、講演をいたします。ところがその講演はジョージ・バードウッド卿 (1832-1917) という元インド行政官から、ひどい悪口を加えられます。ハヴェルがすばらしいという、スリランカのアヌラダープラの仏像についてバードウッド卿は悪態をついていて、*This senseless similitude in its immemorial fixed pose* 云々と言う。*Senseless* 意味のない、似像、永久にこり固まったポーズで、*nothing more than an unspired brazen image* なんのインスピレーションも受けていない、ただの真鍮の像に過ぎない。*Vacuously squinting down its nose to its thumbs* ぼんやりまなこの鼻づらでやぶにらみに親指を見おろしつつ *A boiled suet pudding would serve equally well as a symbol* 煮込んだプディングだ

って、同じくらいシンボルの役には立つだろう、とにくまれ口を効いた。

この裏に何があったのか、ごくかいつまんでお話をいたします。バードウッド卿の価値観は、美術、彫刻と言った場合、グレコ・ローマンのプロポーシヨンにのっとったものでないと、彫刻とは言えまい、とする考えです。これに対して、ハヴェルという人は、グレコ・ローマンの肉体性とは違って、むしろこうしたインドの座像の中にこそ、インドの精神性が宿っている、そしてそれは、インドが外国から何も影響を受けていない、純粹のインド製性 (Indianness という言葉を使っています) の頭れであり、これを評価していかなくてはいけない、と主張するわけです。

例えばガンダーラの美術というのを考えていただくと、ここで何が問題になっているのかわかると思います。つまり、一九一〇年くらいま

で、インド美術を研究していたヨーロッパの専門家たちは、ガンダーラ美術こそインド美術の最高傑作であると、考えていた。ギリシャのプロポーシヨンをもった仏様だとなれば、これはヨーロッパで教えられている美術の観念でもって美術作品だと認め得るわけですね。しかし、ハヴェルから見ると、舶来の非インド的要素が混入しているからこそインド美術も評価に値する、などという価値判断には、耐えられない。インドには、インドとしての美がある。それがどこから発しているかといえ、ヴェダーンタの哲学であり、ウパニシャッドの真理に基づいていなければならない。当然ながら、ハヴェルという人は、ガンダーラの美術に対しては非常に低い評価を下しています。これは、インド純粹のものではなくて、ローマの悪い影響がある。従って、精神性というものが感じられない、と。今日から見れば、ハヴェルの考えていたインド

美術観は、極端に見えるかもしれませんが。しかも一度、当時のインドに戻りますと、外国製品を排除して、インドの国産品奨励を訴える、スワデシ運動が広がっていた。そうしますと、一九〇八年のハヴェルのインド美術論というのは、実はそのスワデシ運動の美術版だったということができるだろうと思われます。

クーマラスワミー

そのハヴェルの援護射撃をやったのが、マナダ・K・クーマラスワミー (1877-1947) という人でした。このクーマラスワミーは、同じ一九〇八年に、『*The Aims of Indian Art*』インド美術の目的』という文章を書いています。インド美術を一目で見ると、あまりに、目もくらむばかりの変化があるけれども、そこには一つの統一性というものがある。その一つにま

めあげている原理というものも、必然として、理想主義でなければならなかったのだ。というのも、インドの思想の、統合・総合のもまた、一つであって、『not many』「多」ではなかったからだ、と。

ここに見える、『one』。これがどこから出てきたかお分かりですね。つまり、ヴィヴェカーナンダと会ったときに、天心が耳にしたアドヴァイティズム、一つにして、多ではないと言った、あの言葉が、クーマラスワミーの言葉としても、響いている。

このような、クーマラスワミーの説に支えられてハヴェルは、インド美術についての、次の本を一九一一年に出します。『*The Ideals of Indian Art*』。先ほども申しましたように、この題名からして、この本は岡倉のインスピレーションをじかに受けて書かれた本である。つまり、岡倉の『東洋の理想』のインド版に等しいこと

はもうお分かりだと思えます。ハヴェルはこの

本の中で、岡倉のことをこう言っています。

The distinguished Japanese art critic, Mr.

Okakura, 『東洋の理想』の著者である岡倉は、

芸術や哲学において「アジア全体は一つである」

ということを正当にも主張した。しかしながら、

the paramount importance of Indian philosophic

religion 云々とありますが、インドの哲学的宗

教の卓越した重要性をつかむためには、ヨーロ

ッパの方法論をもつてしたのではだめなのだ、

と言っている。こうしたいわば国民主義的なイ

ンド美術像形成にあつて、じつはその背骨とし

て、岡倉の著作が利用されていく。そうした文

脈が一九一〇年前後のインドにあつたわけで

す。ではどうしてそうした事実が、日本では忘

れられてしまったのか。このことを最後に見て

おきたいと思えます。

「時代遅れ」とされた『東洋の理想』

そこで、三番目に、もう一人インド美術の専

門家を、登場させなくてはいけません。ヴィン

セント・スミス Vincent Smith という人がいま

す。一八四八年に生まれて、一九二〇年に亡く

なっている人ですが、*History of*

Fine Art in India & Ceylon という一九一一年の

本がございます。このヴィンセント・スミスと

いう人は、これ以前にも、インドの美術を論じ

ており、やはりガンダーラの美術が最高峰であ

るという立場をとっていました。ところが、こ

の一九一一年の本で、この立場を大きく変えま

す。その背後には、ハヴェルや、クーマラスワ

ーミーの最近の研究がありました。ではスミス

は、岡倉をどう評価しているか。結論から言う

と、岡倉に対して非常に批判的です。A

Japanese author has come to the strange conclusions

一人の日本の著作者が、へんてこりんな結論に至ってしまった、と。つまりオカクラによれば、ガンダーラの美術について、より深くより情報が行き渡った研究がなされたならば、そこには、ギリシャの影響よりも、むしろ中国の影響のほうが目立つであろうということがわかるであろう、と。確かに、岡倉の『東洋の理想』にはそう書いてありますね。スミスはちよつと、皮肉っぽく、結論としてこういっています。It would not be worth while to notice Mr. Okakura's rash assertions 岡倉さんのむちゃくちゃな主張というものにあって注目するまでもないのだけれど、but for the attention that his book has received in certain quarters ある種の人たちの間で、岡倉の本、つまり、『東洋の理想』が注目を集めたから、ここでちよつと触れておかねば、まずいだろう、と。そこで、岡倉が何をしたのかと言うと、for its attempted vindication of the claims of

Asiatic as against European art ideals. ヨーロッパの芸術の理想に対して、アジアの芸術の理想というものがあるのだと、その存在を主張する雪辱の試みにおいて、その限りににおいて、岡倉は注目されねばならない。これはかなり辛辣な文章であります。今日、一九一一年の段階でみて、美術史的には、『東洋の理想』はもう過去の本である。スミスはそうはっきり宣告している。

岡倉没後に起ったこと

岡倉は一九一三年に亡くなるわけですが、その晩年に、そして岡倉が亡くなったあとに、何が起ったかということ、最後に三つほど例をあげて、かいつまんでお話しします。

『書畫骨董雑誌』の大正六年ですから、一九一七年になりますか、そこに瀧精一という人が、『健駄羅藝術の批判に就て』という論を書いて

います。この文章をざっと見ておきましょう。そこに、クーマラスワミー、ハヴェルという名前が出てきます。これを瀧は、「新ナシヨナリスト」という具合に、名づけています。そして、この人たちから見ると、インドの彫刻に新しい見方が出てきたという。「印度には昔から烏波尼沙土の萬有神教的哲学があつて、それがすべての印度の藝術の根柢となるべきものである。」これはさきほど説明したところですね。「其の思想を根柢となして出来る印度藝術には、一種特有の深遠なる長所がある。然るに健駄羅藝術には、それはない。彼の如く外部から借りて来たもので拵しらへ上げたものには、印度固有の藝術に見る様な尊さが缺けて居る」と。ちなみにこの「健駄羅藝術の批判に就て」という論文の中で、瀧精一は、一度も岡倉の名前には、言及しておりません。

瀧精一、これはどういう人だったかと言いま

すと、実は、一九一四年に東京大学文学部に美術史の講座ができて、その最初の美術史の先生になる人です。それよりも、もつと岡倉と関わることで言っておかなくてはいけないのは、実は一九〇〇年から、美術雑誌『国華』の編集長になっています。つまり瀧という人は、岡倉の美術研究誌発刊事業に関しては、言ってみれば後釜、その後継者となるべき地位にある人だったということ。では、その瀧は、いったい岡倉をどのように評価していたのか。

岡倉が亡くなった一九一三年、ちよつとなまましい話になって申し訳ないのですが、当然これは、雑誌を創刊した岡倉に対する追悼号であつてもいいと思われるところですが、『国華』に不思議な記事が出ております。岡倉が創設した日本美術院に対する中傷としか思えない文章。無記名でありますけれども、曰く、この日本美術院が行ったことは、失敗であつた。東洋

と西洋を結びつけて、新しい美術を作ろうとすることは、うまくいかなかった。その結果、日本画は滅びた。同時に洋画も滅びた。この一派の試みたことが、空しい戦敗となったことも当然である、と。

ところで、瀧は、ガンダーラ美術に対する近年の批判について、もうひとつ別の論文「印度藝術の東亞に及ぼせる影響に就て」『国華』第三一一号（一九一八）を書いていきます。そこに実はさつき引いた、スミスの言葉をそのまま使っています。瀧の訳で読みますけれども、「岡倉氏の無謀なる主張には、耳を傾むくるの要なけれども、氏の著書が、東洋主義の主張をなすものとして、有力と認められたるものなるゆゑに、黙過しがたしといへり。」ちよつと意地悪に言えば、スミスという人の、いわば權威を笠に着て、瀧は自分の先輩である岡倉をここで葬り去っているに等しい。岡倉が亡くなった直後

にこうした状況が生まれかかっていたということは、知っておいて、よいことだと思ひます。

伊東忠太の反応

もう一人、伊東忠太という人のことを見ておきたいと思ひます。伊東忠太は、現在の建築学会を事実上作つた人であります。その伊東に岡倉の追悼記「予の見たる岡倉覚三氏」という文章がございます。「氏自らも世間も氏を以て学者とは認めなかつた様であるが」とあります。そうは言いながら、「学問も頗る該博であり、識見に至ては実に高邁であつた。」そのあと、二行ほどいきますと、「但材料の組織が未だ科学的に整て居らぬ様に思はれるが」云々、ということを言つて、そのあとで、「勿論これは追ひ追ひ大成せらるる成案が有たのであらう」。これは伊東の結論になります。が、「要するに、

氏の学問は所謂学究的でない」。つまり、「微に亘り細に入り考證三昧に憂身を簞す」流ではない。決して、岡倉に対して失礼にはならないようにして、だけれどもいろいろ注文はあるんだよ、ということのをのぞかしている文章ですね。

さて一九〇〇年、さきほどのシカゴの万国博覧会につづいて、パリで万国博覧会が開催されます。このときそれにあわせて、日本で初めての公式の美術史が編纂されます。一九〇〇年に、*Histoire de l'art du Japon*とフランス語で申しますけれども、『日本の美術史』という大きな著作が、万国博覧会を記念して、日本政府の肝いりで出ています。実際の編集作業に、当初は岡倉天心が関わっていますが、例の美術学校事件、云々があつて途中で退きます。そのあとは、福地復一が一応の責任者になって、刊行される。そのときに、伊東忠太も建築の部分の執筆のために参加しています。その章立ては、途中まで

は岡倉が唱えていた時代区分、つまり飛鳥や天平という呼称はすでにあり、白鳳という言葉はまだ出てこないのですが、それに沿って構想されていた。推古朝の代表作としては法隆寺の釈迦三尊をあげ、つづく天智天皇の時代というところ、その代表作として法隆寺の金堂の壁画が指摘される。つまり、時代時代に一種の時代精神というのがあつて、建築もその中にはいつている、というヘーゲル史観に沿った作り方になっている書物です。（ただ、完成時には、こうした時代名称は天皇の名に置き換え、推古朝、天智朝、聖武朝と、日本の古代についての時代区分に従つて記述をすすめている。この変更は皇国史観の反映を見る論者もありますが、福地がその立役者だったのか否かは不明です。）

さて一九一六年に、この書物の菊判日本語版が『稿本日本帝国美術略史』と題して一般向きに出版されます。（一九〇一年にも大判の稿本

が印刷に付されますが、部数僅少に留まっています。その一九一六年版出版のうちに、伊東忠太は、建築の部分に自ら采配を振ります。ここで本の体裁は一変してしまいます。どうなるかといいますと、第一部に美術があつて、第二部に建築という具合に二部構成となり、建築は隔離されてしまうのです。そうしますと、今までは、各時代における美術の一部門としての建築という配置だったのが崩され、建築の部分は、建築史としていわば「独立」してしまう。天心亡くなって三年後。伊東忠太が学問としての建築史というものを、美術史から「分離」しようとしてやったことだと思えます。日本の場合ですと、美術史は文学部に属しており、建築史というのは、工学部建築学科に入っておりまして、これは諸外国と比べても、工学部が大学の一学部となった、という日本の特殊事情を反映した現象ですけれども、そうした中で、伊東

は、公式の「日本美術史」にあつても、建築の部は自分の責任として切断してしまつたわけですね。これも考えようによつては、岡倉天心がそもそも当初に示していた日本古代美術史の構想に対する裏切りといえますか、そこからの独立宣言といわざるを得ない。

いずれにしても、そういう状況があつて、一般の人が岡倉の著書を日本語訳で読むことができるようになるのは、もつとはるかにあとのことですね。つまり、最初のまとまつた全集というものが、聖文閣から刊行されるようになるのは、昭和でいうと一〇年から一一年、つまり一九三五年から三六年。それ以前の段階で、英文で書かれた岡倉の著作に接することができた日本人というのは、もちろんインテリは当時、英語が大変できましたけれども、数の上では限られていた。その前にもうひとつ一九二二年にも『欧文著作抄訳』が編まれています、英文著

作の全文が網羅されたのは、三六年の全集が最初です。そして天心がインド滞在中に書いた未刊の英文手稿が岡倉古志郎によって発見されるのも一九三六年。三六年というと、二・二六事件の年です。そしてそれが、『東洋の覚醒』という名前前で出版されるのが、三八年。その二年後は、皇紀二六〇〇年。そこで作られてしまった超国家主義者岡倉のイメージが、近年に至るまで、かなり大きな影響を及ぼしてきた。

それに対して今日、最初のところでお話ししたかったのは、岡倉が一九〇二年、インドに行っていたときに英文でその手稿を書いた折の、その環境はいかなるものだったのか、という問いでした。それは植民地下のインド、そして間もなく独立運動の最初の芽生えが見えようとするベンガルであり、カルカッタであった。そこで岡倉が考えていたことと、それから一九三〇年代になって日本のおかれた状況と。この落差

というものは、無視できないでしょう。さらに岡倉没後より、特に美術史を専門とする当時の研究者たちのあいだには、一種の岡倉に対する不信感とともに、岡倉を乗り越えたいという気持ちが見えてとれます。これが今日に至るまで、岡倉天心の評価に少なからぬ影をおとしてきたのではないかと考えている次第です。長らくのご静聴に感謝申し上げます。

(二〇〇一・八・七)

*ここに抄録した講演の内容には、その後別途刊行した論文、「岡倉天心とインド」(モダニズム研究会編『モダニズムの越境』人文書院、二〇〇四年)と重複する箇所のあることをお断りする。なお岡倉の著作とシスター・ニヴェディタの著作との比較は、Shigeni Inaga, "Sister Nivedita and her Kali: The Mother, The Web of Indian Life and Art Criticism," *Japan Review*, International Research Center for Japanese Studies, Nr.16, 2004, pp.129-159を参照されたい。

ワタリウム美術館の
岡倉天心・研究会

2005年1月31日印刷

2005年2月10日発行

監 修 ワタリウム美術館
装幀者 近江デザイン事務所
発行者 三武義彦
発行所 株式会社右文書院

東京都千代田区神田駿河台1-5-6／郵便番号101-0062
tel. 03-3292-0460 fax. 03-3292-0424
<http://www.yubun-shoin.co.jp/>
mail@yubun-shoin.co.jp

印刷者 互惠印刷
製本者 渡辺製本

印刷・製本には万全の意を用いておりますが、
万一、落丁や乱丁などの不良本が出来いたしました場合には
送料弊社負担にて、責任をもってお取り替えさせていただきます。

ISBN4-8421-0045-1 C0071